

《原 著》

助産師の分娩介助時に経験した倫理的ジレンマ

黒木 千恵¹⁾, 中嶋 文子¹⁾, 奥川ゆかり¹⁾, 久保田君枝²⁾

¹⁾ 相山女学園大学看護学部, ²⁾ 浜松医科大学助産学専攻科

要 旨

〈目的〉医療機関に勤務する助産師が、分娩介助のどのような場面で倫理的ジレンマを経験しているかを明らかにすることである。〈方法〉S県内の医療機関に勤務する助産師303名を対象に、分娩介助時に対象者自身が経験した「倫理的ジレンマの場面」に関する経験を自由記述にて回答を求めた。分析は質的帰納的研究方法を用いた。〈結果〉62名の回答が得られ分析対象とした。平均年齢は35.2歳(22～59歳)、経験年数は9.8年(1年目～29年目)であった。勤務場所は、病院52名(83.9%)、診療所10名(16.1%)であった。助産師の分娩介助時に経験した倫理的ジレンマは、【医師との判断の相違(助産師—医師)】【助産師間の判断の相違(助産師—助産師)】【助産師と産婦・家族の分娩に対する価値観の相違(助産師—産婦・家族)】【環境要因による助産ケアの制限】の4つのカテゴリーが得られた。〈考察〉助産師は分娩介助の場面において、医師、同僚、産婦・家族に対する価値の対立や、環境によるケアの制限に対してジレンマを経験していることが明らかとなった。助産ケアの提供にあたっては、分娩の主体が産婦であるということを軸に、限られた条件の中でいかに対象の満足のいくケアを提供するかを、倫理的視点とエビデンスを持って医師や同僚とともに話あうことが必要である。

キーワード：倫理的ジレンマ 助産師の経験 分娩介助